



前川千帆 《少女》 1927年頃 公益財団法人平木浮世絵財団蔵

vol. 99

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

千葉市美術館ニュース 「C'n」(シーン) 99号

〔編集・発行〕千葉市美術館 〒260-0013 千葉市中央区
中央3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku,
Chiba 260-0013, Japan <https://www.ccma-net.jp/>
〔発行日〕2021年6月28日
〔印刷〕株式会社 エイチケイ グラフィックス

 ccma_jp  @ccma_jp



歌川国利 《しん板 ねこの世界》(部分) 明治19年(1886) 青木コレクション(千葉市美術館寄託)
中村芳中 『光琳画譜』(部分) 享和2年(1802) 千葉市美術館ラヴィッツコレクション

新連載 / 館長のつれづれコレクション案内

世界のフジタが描いたゆかりの地・房総



藤田嗣治 《夏の漁村 房州太海》
油彩・カンヴァス 1937年 52.8×45.0cm 千葉市美術館蔵

4月1日から、全国レベルの優れた展覧会をいくつも開催してきただけでなく、質の高いコレクションを持っている千葉市美術館の館長を務めさせていただくことになりました。当館の優れた収蔵品について、皆様にご紹介するとともに、私自身が理解を深めていきたいと思い、このコーナーで収蔵品について書かせていただくことにしました。

最初にとりあげるのは房総ゆかりの画家である藤田嗣治の「夏の漁村 房州太海」(カンヴァス・油彩 1937年)です。私の郷里である秋田の平野政吉美術館が藤田の作品を多数所蔵していたので、親しみのある画家ですし、この作品には1930年代の藤田らしさがいくつも見いだせます。

エコール・ド・パリの画家フジタとして知られる藤田嗣治の父^{つぐあきら}嗣章は房州安房の出身で、陸軍軍医となり、森鷗外の後任として陸軍総監となった人物です。嗣治の画家への志を尊重し、海外留学の時期について、ドイツ留学を経験している同僚、森鷗外に相談するなど心を配っています。中学を卒業してすぐに留学するよりも東京美術学校を卒業してからがよい、との鷗外の助言に従い、嗣治は東京美術学校に進学しました。藤田と房総の縁は父の出身地であることにとどまりません。美術学校在学中、スケッチ旅行で房総半島を訪れた藤田は、女子美術学校で裁縫を学んでいた鴛田とみと出会い、1912年に当時では珍しい恋愛結婚をしています。とみは市原出身で、藤田と同年。女子美術学校卒業後は、東金高等女学校教師となっています。藤田はとみを日本に残して1913年に渡仏。1914年に第一次世界大戦が勃発しますが、藤田は一人前の画家になるという留学の目的を果たすためフランスに残る決心をし、とみと別れることとなります。

1918年の終戦の翌年、サロン・ドートンヌで注目され、乳白色の下地に細い墨線で描いた裸婦などで、パリ画壇の寵児となり、29年に一時帰国。33年から49年までは日本を拠点に活躍し、各地を巡って地域の特色ある風景を描いています。このころはフランスでの画風とは異なり、色彩が豊かになっています。「夏の漁村 房州太海」はそのころの作品です。

1937年の2、3月に、藤田は秋田市の平野政吉邸で大壁画「秋田の行事」を描き、同年6月に東京銀座の日動画廊で開催した第4回近作展に「佐渡小木港の雨」「夏の漁村 房州太海」など26点の油彩画を出品しています。当館所蔵作品の左下には「房州太海 嗣治」「1937」と書き込みがあります。海を見下ろす石段の上の家が描かれ、物干し竿に着物や桶、ざる、漁網などが掛かっています。それらの物によって人の営みを思わせるのは藤田が得意とするところ。赤く大きな背中の模様と、裾に赤い「大漁」の文字のある万祝が目を引きます。藤田はこうした地域色ゆたかな布製品を好み、収集していました。最も目立つ色で布を描いているところにも藤田らしさが感じられます。

当館の学芸員諸氏は、この作品は画家の宿泊先として有名な太海の旅館に藤田が滞在して描かれたこと、安井曾太郎の「外房風景」(1931年)という有名な絵にも同じ場所が描かれていること、「房州太海」と書込みのある別の作品を藤田が二科展に出品していることを教えてくれました。所蔵作品についてこうした情報が蓄積されているのは高い学芸力の証しです。コロナ禍が終わったら、太海を訪ねてみたいと思います。作品に描かれたのと同じ景色を訪ねると、それを描いた画家がぐっと身近に感じられます。

〔館長 山梨絵美子〕

平木コレクションによる

前川千帆展

SEN PAN MAEKAWA



平木コレクションによる 前川千帆展

会 期 2021年7月13日[火]～9月20日[月・祝]
開館時間 10:00-18:00(金・土曜日は20:00まで)
休 室 日 8月2日[月]、8月16日[月]、9月6日[月]



図1 《あわてものの熊さん》（『読売サンデー漫画』1931年2月1日号） 夜鳥文庫蔵

——まず、前川千帆とは、いったいどのような作家なのでしょう。

千帆は、漫画家からキャリアをスタートさせました。「一世を風靡した」と言われるくらい、当時は漫画家として有名だったようです。読売新聞に専属漫画家として勤め、とくに『あわてものの熊さん』（図1）という連載が大人気でした。漫画家と並行して、木版画家としての活動を始めたのは、大正8年ころ。その後、昭和10年ころに、漫画の連載をやめ、木版画に軸足を移します。自分で彫り自分で摺る「創作版画」の版画家たちのなかでは、恩地孝四郎、平塚運一と並んで、「御三家」と称される版画家です。

——なぜ木版画を始めたのですか。

若いころに、高村光太郎がやっていた琅玕洞という画廊で、南薫造の版画を見たという記述が残っています。また、彫刻家で版画家の石井鶴三の影響も強かったようです。体質的に、木版画の和紙の風合いや、素朴な雰囲気が好きだったのだらうと想像します。銅版画や石版画はほぼ手がけず、木版一筋。木版画が性に合っていたのでしょう。

——その前川千帆の大回顧展が、なんと44年ぶりの開催。開催の経緯をお聞かせください。公益財団法人平木浮世絵財団の素晴らしい前川千帆コレクションを展示する機会に恵まれたことから、当館の所蔵品や個人コレクションを合わせて、開催することとなりました。また、最近、新版画ブームをひしひしと感じており……。あらためて、創作版画のおもしろさを伝えたいという気持ちもありました。

——漫画家時代の作品から、木版画、版本、豆本など、約350点もの作品を展示するそうですね。

じつは千帆は、漫画家としての作品が圧倒的に多いのです。今回は個人コレクターの方に協力いただき、一部ではありますが漫画の仕事もご紹介します。また、とくに本は、たくさんの作品を展示する予定です。こちらは、まとまったコレクションが残っており、たとえば『閑中閑本』シリーズには、全巻に同じエディション番号がついています。内容の細やかさにも驚かされます。1冊のなかに、これだけの図と字。字も自分で彫っているんですよ（図2）。



図2 『ゴールデンバット動物園』より 1944年 個人蔵

——版画では、人物が描かれていることが多く感じます。

漫画家だったことも影響し、モチーフはかなり人物に偏っています（図3,4）。人物のいない風景や静物はほとんどありません。人が好きだったのかな、と想像します。自分も見る人も楽しいと思えるものをつくる人で、作風は生涯変わってしまっただけ面もあります。でも、こういう人がいてもいいんじゃないか、と思っています。いま見ると、非常にほっこりしますよね。

——日本のアニメーション映画の誕生にかかわったという、大変興味深いエピソードもあります。

日本のアニメーション映画元年は大正6年で、3つの作品がこの年に発表されます。そのうちのひとつの「なまくら刀」に、前川千帆が関わっていました。これまで幸内純一の制作とされていましたが、彼が雑誌のなかで、「前川千帆との共作」と述べています。この作品は、近年現物が発見され、現存する最古のアニメーション映画でもあります。展覧会のなかでも、映像をご紹介します予定です。

——作品はどのように発表していたのでしょうか。

官展や日本版画協会展にマメに出品していました。創作版画を普及させたい気持ちもあったようです。その一方で、個人間での作品の販売もしていました。会員制で、受け手の顔が直接見えるかたちで、作品を頒布していたんです。千帆が生きていたころは、千帆のおかげで幸せな気持ちになった人がたくさんいたはずですよ。いま思うとなかなか贅沢な時代ですが、当時のこういったやりとりを想像する機会にもなったらいいな、と思っています。

——実際に作品を手に取りたい、手に入れたい、という気持ちが湧いてきそうです。

正直、復刻版を作るほうが千帆の魅力が伝わるのではないかと、という気持ちもあります。千帆の良さは、手のひらに乗せないといけないところがあるんです。展覧会というかたちをとることの矛盾を、準備をしながら感じる今日この頃です……。しかし、たくさんの作品を残した人なの



図3 《新東京の影芝居》 1958年 公益財団法人平木浮世絵財団蔵

で、いまでも作品を購入することは可能です。ぜひ、古書店などで探してみてください。

——そんな想いもあるなかですが、最後に展覧会のみどころを教えてください。

一枚摺りの作品で言えば、彫りも摺りもどれも見事です（図5）。ここまで、自分で彫り、摺ることのできる人はそういません。あとは、なにより、小さいもののたちの良さです。シリーズものの本や、豆本たちが並んでいるようすが、とてもか



図5 《屋上風景》 1931年 公益財団法人平木浮世絵財団蔵
わいらしい。一点ではなく、作品の群れを見せたい作家です。きつと、手にとってみたい、あるいは自分もつくってみたい、という気持ちが湧いてくるはずですよ。そこに、前川千帆の魅力が詰まっている気がします。

【話し手: 上席学芸員 西山純子】



図4 《新東京百景 渋谷百軒店》 1929年 千葉市美術館蔵

同時開催

コレクション展

江戸絵画と笑おう



「笑い」をキーワードにして選んだ江戸・明治の絵画を、3章構成でご覧いただく本企画では、夏休みの開催に合わせ幅広い年代に親しみやすい作品が大集合します！

担当者のイチオシは大阪の絵師・中村芳中による『光琳画譜』。ほのぼのとした可愛らしさ



中村芳中 『光琳画譜』 1802年 千葉市美術館ラヴィッツコレクション

に思わず微笑んでしまう仔犬の図あり、福神達のコミカルな恋愛模様あり、謡曲「高砂」の松の精霊夫婦がお酒の量で揉めている（私にはそう見えますが…）図あり。めくる度に笑みがこぼれるような図が満載なのですが、冊子状である



ため普段の展示では上巻・下巻の見開き1図ずつしかご覧頂けないことをかねがね寂しく思っておりました。今回はこの『光琳画譜』を「おうちでえどわら」として、動画で全頁を会場でもご自宅でもご覧いただけるように準備していま

す。もちろん、この他にも心をほぐしてくれる禅画・戯画・明治の浮世絵を多数ご紹介致します。色々制約の多い日々が、もう少し続きそうですが、美術館でひととき、和やかな時間を過ごして頂ければ幸いです。【学芸員 松岡まり江】

動画はこちらから！
7月13日より順次公開





2021年4月15日～7月4日「つくりかけラボ03
武藤亜希子 | C+H+I+B+A ART シェアばたけ」レポート

ART シェアばたけ観察日記

千葉県在住の現代美術家・武藤亜希子さんをお迎えした「C+H+I+B+A ART シェアばたけ」では、空間を「はたけ」につくりかえました。会期中、たくさんの人の参加によって、どんどん育っていったはたけ。新しい枝が伸び、ふしぎな実が実り、みなさんの手ではたけが豊かに広がってゆくようすをレポートします。

〔写真（右上を除く）：加藤甫〕



4月



会場の外には、制作スペースが設けられ、いつでも「きみだけの実」をつくることができました。はじめはなにもついていなかった紐に、どんどん新しい実が実ってゆきました。

どこにつけよう？

5月



武藤さんによるアーティストワークショップでは、壁に枝を伸ばしたり、天井にひょうたんを吊るしたり。カラフルでちょっとふしぎな植物がいっぱい育ちました。

＼できたー！／



6月

会期中、滞在制作を行っていた武藤さん。革でできたやわらかい実は、スナップボタンでくっつけたり外したりして、好きな場所に芽吹かせることができるようになっていました。

カタカタ／
コトコト／



2021年7月14日～10月3日「つくりかけラボ04 飯川雄大 | デコレータークラブ – 0人もしくは1人以上の観客に向けて」
プレインタビュー：「デコレータークラブ」って、なに？

「デコレータークラブ」とは、海藻や小石を身につけて姿を変えるカニのこと（clubではなくcrabなのです）。美術家・飯川雄大さんは、このカニの名前をタイトルに用い、観客の気づきや反応を誘うさまざまなプロジェクトを行っています。今回、千葉市美術館でも行われることとなったこのプロジェクト。いったいどんなプロジェクトなのか、千葉市美術館ではどんな内容になるのか、飯川さんにおはなしを聞きました。

●プロジェクトを始めたきっかけをお聞かせください。

学生時代、とあるドキュメンタリー番組を観ました。動物を紹介する番組で、擬態するカニ、デコレータークラブが取り上げられていました。いろいろな映像から、デコレータークラブのおもしろさや美しさは伝わってきたのですが、海の中で突然デコレータークラブを見つけたときの驚きや感動が、まったく伝わってこなかったんです。

海に潜ったダイバーが、偶然デコレータークラブを見つけるという状況は、特別な状況です。カニは隠れているだけなのに、ダイバーは未知のものを発見したと思って、その状況に特別な価値をつけているんです。このような状況を、自分の作品で作れたらいいな、と思ったのが最初のきっかけです。

●過去に行ったプロジェクトにはどのようなものがあるのでしょうか。



【図1】 飯川雄大
『DECORATORCRAB GUIDE
BOOK』 2012年 表紙

最初に作ったのは、『DECORATORCRAB GUIDE BOOK』という写真集【図1】です。ふつうガイドブックは、目当てのものを紹介しますが、この写真集ではあえて、主題や写したいもののまわりにあるものだけを撮っています。これを見たあとに、無意識に似たような場所を探したり、似たような場所に出くわしてデジャヴに陥ったり、偶然を自ら引き寄せるような構造を作りたくて、制作しました。

つぎに取り組んだのが「ピンクの猫の小林さん」【図2】です。まさに、あのドキュメンタリー番組からダイバーの驚きや感動が伝わってこなかったことを、べつの手法に置き換えた作品です。この猫は、ものすごく大きくて、変な場所に置かれていて、うまく写真を撮ることができません。観客に対して、写真や映像は、おもしろさや感動を共

有するための道具としては不向きなのではないか、と問いかけているんです。

「配置・調整・周遊」【図3】は、表面的な部分からしか人は判断できない、ということから着想しています。たとえば、デコレータークラブも、カニが身につけているものを剥がしたり裏返したりするまで、それがカニであるとはわかりません。この作品も、一見、ただの壁が展示室にあるだけですが、実はこの壁は、さわると動くことがわかります。これをきっかけに、表面からは見えない部分を想像したり、考えたりできたらと思い、作った作品です。

●千葉市美術館では、どのようなプロジェクトが展開されるのでしょうか。

ダイバーがデコレータークラブを見つけた状況を俯瞰してみると、擬態するカニに対して、ダイバーはべつの価値をつけて、その状況を楽しんでいると言えます。同じように、観客のみなさんが、僕のインスタレーション作品に対してべつの価値をつけて、その価値づけや行動がきっかけとなり、なにか新しいものが生まれる。そんな循環を、観客のみなさんと展示室を使って作りたいと考えています。カニのふりをして。

〔話し手：飯川雄大（美術家）〕



【図2】《デコレータークラブ – ピンクの猫の小林さん》 2020年
並木クリニック中庭の展示風景（撮影：阪中隆文）



【図3】《デコレータークラブ 配置・調整・周遊》 2018年
あまらぶアートラボ A-Labの展示風景（撮影：齋生田兵吾）

美術館の仕事を紹介します！

その13 月イチ！ 常設展示室の展示替え作業レポート

常設展示室では、「千葉市を中心とした房総ゆかりの作品」「近世から近代の日本絵画と版画」「1945年以降の現代美術」の3つの収集方針に沿って、豊かなコレクションを味わうことができます。みどころは、なんと、月に1回展示替えを行っていること。作品保護の点から、とくに「近世から近代の日本絵画と版画」は、見られる作品が毎月変わります*。第一月曜日の休館日に行われる展示替え作業をレポートします。

*現代美術は3ヶ月ごとに展示替え、房総ゆかりの作品は展示作品による。

準備



出品リストやキャプションをはじめ、館内に掲出するパネルやポスターも、展覧会に欠かせないアイテムです。スタッフ同士で手分けをして、制作物を用意しています。

撤去



新しい作品を展示するのももちろんですが、まずは入れ替わる作品を撤去しなければなりません。バージョンのページを開くためにつけていた透明フィルムを外しているところです。

展示



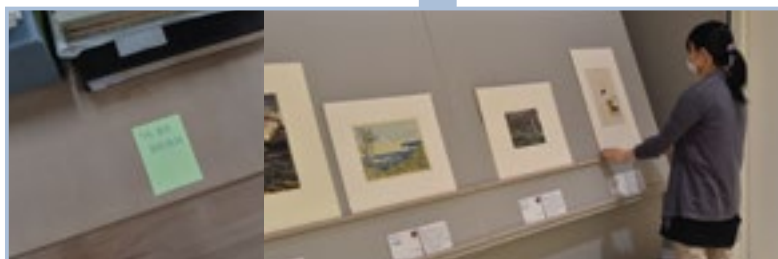
作品やキャプションの位置は、ミリ単位で調整します。とくに、展示台の陳列作業は、学芸員が行うことがほとんど。メジャーを使って、細かく位置を決めています。

完了！



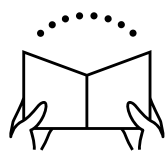
照明を調整し、展示替え完了！
6月の「近世から近代の日本絵画と版画」のテーマは「富士の絶景」「海と山に遊ぶ」。季節に合わせた作品をどうぞお楽しみください。

搬入



あらかじめ用意しておいた作品を、展示室に運びます。版画を展示している展示台は、展示替えの負担を減らすために、特注で制作したものです。

[取材日：2021年6月7日]



びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー

本をみる、美術をよむ vol.4 びブラリのあたらしい本

びブラリに、あたらしい本がまとまってやってきました！ そのなかから、蔵書の幅広さを感じられる5冊をご紹介します。期間限定の「びブラリのあたらしい本」コーナーに展示していますので、ぜひお読みください。

モラヴィア美術館 編 『美術館って、おもしろい!』



チェコの美術館がつくった、超・本格的な美術館ガイド。書かれているのは超・コアな学芸員の業務内容だったり、美術館裏事情だったり……なかなか玄人向けの一冊です。

junaida 『の』



すべては『の』というタイトルに込められています。びじゅつライブラリーのあたらしい本の『の』のなかの……。こんなふうにして、『の』がたたく物語は、どこまでも広がっていきます。

ミヒャエル・エンデ 『モモ』



複数のバージョンがある本ですが、今回は、函入りの愛蔵版を揃えました。装丁も楽しめる一冊です。また、『モモ』の挿絵は、ミヒャエル・エンデ自身が手がけています。ご存知でしたか？

松本大洋 『ルーヴルの猫』



ルーヴル美術館の屋根裏に、人間から隠れて棲みつく猫たち。ある一匹の白猫が、掟を破って展示室へ出かけます。ルーヴル美術館のなかに猫がいる。そんなこと、あったらいいのになあ。

伊藤亜紗 『どもる体』



この本のテーマは「吃音」。観察やインタビューを通して、医学的なアプローチとは違った視点から、吃音について丁寧に書かれています。身体にまつわる本も、今後、増やしていく予定です。



「びじゅつライブラリー」とは、千葉市美術館4階にある図書室です。美術にまつわる親しみやすい本を、約4,500冊配架しています。



ぜひふらっと遊びにきてください！



千葉市美術館 友の会 会員募集中！ ▶お申込は美術館の受付窓口、またはHPから。

ちばしばフレンズ

どなたでもご利用いただける会員プログラム。年間を通して何度でも企画展・常設展が無料でご覧いただけます。

入会金1,000円 年会費2,000円

【お問合せ】友の会担当 043-221-2311

ちばしばフレンズ・ライト

39歳までの方を対象にした会員プログラム。常設展はいつでも無料、お好きな企画展を年間2回までお楽しみいただけます。

※お申込みの際に年齢のわかるものをご提示ください。

入会金500円 年会費1,000円